

国旗や紙幣にもアンコール・ワット



「今もアンコール王朝」

サビエル生誕五百年

巡礼の道

180

藤屋 侃士
(下松市幸ヶ丘)

朝、カーテンを開けると窓ガラスには水蒸気、棧には水滴。健康に良いからと、寝る前に加湿器をつけるからだろう。外気との温度差は冬の訪れである。



(朝日を見るために) 早朝からたくさんの方が

暖かかったカンボジアを思い出す、九世紀から十五世紀に存在したクメール人のアンコール王朝は最盛期にはインドシナ半島全域とマレーシア半島の一部までを領土とした大帝國だった。

中でもアンコール・トムを建設したジャヤヴァルマン七世の時が最盛期で、彼の名前はガイドの口から何度も出た。

しかし、この王が死ぬと急速に衰退し、一四三一年、タイのアユタヤの攻撃を受けて王朝は滅びた。にもかかわらず「今もアンコール王朝」という題にしたのは、今のカンボジアがあまりにアンコール遺跡に依存しているからだ。

遺跡に入るのには有料だが、それ

は外国人だけで国民は無料。アンコール王朝の末えいである国民は無料というのは粋な計らいだ。というよりもアンコール遺跡の広さは東京二十三区と同じと言われ、有料でしか出入りできないとなると国民は生活できなくなるからだろう。

外国人から取る料金は結構高い。一日券が二十ドル、約二千円である。三日券は四十ドル、一週間券は六十ドルだ。

入場券を買う前に顔写真を撮られ、それが入場券に印刷され、遺跡に入るたびにチェックされる。

遺跡の観光産業にかかわる人はホテル、土産品販売人などを含めると相当な数になる。入場料収入がカンボジアの予算の相当部分を占めていることは間違いない。

国旗にも、紙幣にもアンコール・ワットが記されている。「今もアンコール王朝」というゆえんである。

遺跡は広大な中に点在し、シエムリアップ

中央右から朝日が顔を出す直前



2009.11.05

の主な遺跡だけでも六十二もあり、今回はそのうちの十五を回った。

いくらアユタヤに敗れたとは言え、なぜ人々はこれだけの文化遺産を放棄し、四百年も密林の中で眠り続けていたのだろうか。

それは謎であり、太陽ははじめ大自然しかそれを知る者はいない。

アンコール・ワットの朝日を見に行くこと

にした。モーニング・コールは午前四時半、外は真つ暗だ。遺跡に着くともうたくさんの方が集まっていた。アンコール・ワットの朝日は春分の日と秋分の日が中央塔の真上に昇るといふ。昔も今も、太陽は昇り、そして沈む。変わるのには我々人間だけである。
(元山口放送取締役ラジオ局長)